

アニタ・ブルックナーの世界 (II)

鈴木 万里

前回、英国の小説家、アニタ・ブルックナーの第1作である、*A Start in Life* (1981) を分析し、伝統的な家族関係に基づく秩序ある世界を中心とした価値観が崩壊し始めて、個人が家族という枠組に囚われることなく各々の可能性や幸福を追求する自由な生き方を享受しつつある現代社会において、どのような選択をすべきか苦悩する主人公ルースの姿を明らかにした。彼女は、自由と解放への渴望を抱きつつも、「自分が何をしたいか」よりも「自分が何をすべきか」という基準に従って、自らの生き方を規定するに至る。その際にルースの価値観を知る手掛りとなったのは、頻繁に描かれる「食事」のイメージであった。彼女は「食事を与える者」としての役割に執着を示すが、それは、かつて祖母が家の中で果たしていた機能であり、家族という共同体を支える秩序の中心を成すものであった。最後の場面では、極めてアイロニカルな形で、彼女はその役割を再現して見せる。

第2作以降の作品においても、ほぼ同様のテーマが繰り返されていくが、主人公が示す人生の選択は、ある方向性を見せ始める。本稿では、第2作目にあたる *Providence* (1982) を検証し、ブルックナーの小説世界が辿る軌跡を追ってみることとしたい。

この作品は、その設定および展開において前作との共通項がいくつか認められる。それらはこの2作のみならず、それ以降のブルックナーの小説世界にもたびたび見出される特徴をなすものでもあるので、取り上げて検討してみる。

まず、主な舞台は英国であるが、主人公は祖父母の代にヨーロッパ大陸から移住してきた家系に属している。従って、英国社会に完全には同化できない、ある種の違和感を抱いて生きている。*A Start in Life* では、祖父母はドイツ出身、*Providence* では、祖父はロシア人、祖母はフランス人である。しかし、いずれも経済的には余裕のある一家であるため、深刻な疎外感や周囲の偏見に悩むことはない。あくまでも、彼らのもつ違和感とは、本来あるべ

き場所から切り離されてしまった生に対する漠然とした不安あるいは憂鬱とも呼ぶべきものに留まっている。

次に、祖母—母—娘という、極めて母系的な一族が登場することも注目に値する。家庭内に男性の存在場所はない。あるいは、あっても副次的なものである。*A Start in Life* では祖父は既に亡く、祖母は台所、母は居間、と各々領域をもっているが、父親の居場所がないことは指摘した。*Providence* でも、一家の中心は洋裁師として成功した祖母であり、祖父は、配達と家事を引受けるという補助的な役割に終始している。父親は、主人公の生まれる前に戦死しており、彼女の住むチェルシーのフラットに飾られている写真としてかすかに存在するに過ぎない。本来、キリスト教を基盤とする強固な父系制社会を構成していたはずの上層中流階級において、女性中心の一族が繰り返し描かれることは、かなり特異な現象といえよう。そして、男性的要素を周縁化する一族の存在形態は、そのまま主人公の、男性という他者を排除するという心理的傾向と同心円を描いているのである。

また、主人公が、両親の家と、一人暮らしのフラットとの間を行ったり来たりする生活形態も両作品に共通している。これは、伝統的な家族の一構成員としての生き方と、都会で自由に暮らす生き方との間で分裂、逡巡している精神状態をそのまま表わしていると考えられる。

更に主人公がフランス文学研究者である点も2作に共通している。*A Start in Life* での研究対象は、裏切られてもなお愛情を抱き続け、援助の手を差し伸べるけなげな女性を描く『ウージェニ・グランデ』であり、*Providence* では、恋愛の果ての倦怠と優柔不断を弁解する物語『アドルフ』となっている。各々の作品が主人公の精神構造と相関関係をもっていることは言うまでもないが、興味深いことに、彼女たちは、相当の業績をあげているにもかかわらず、研究にそれほど熱意をもって打ち込んでいる様子はないのである。むしろ、研究とは他のことができない人がするものだと否定的にとらえたり、あるいは、本当に相応しいことが見つかるまでの一時的な役割と考えている。彼女たちは、経済的自立を可能にし、ある程度の社会的地位を確保してくれる恵まれた状況に満足することは決してない。それはひとつには、仕事上の成功と、精神生活での敗北が平行になっていることに起因している。あたかも、恋愛において敗者となることで自分を罰しているかのようですらある。

以上のように、この作品は前作と共通の設定がいくつか認められるのだが、主人公たちが達する結論は幾分異なったものとなる。それでは次に、内容を

辿りながら、どのような展開を示すのかを検証していくこととする。

Kitty (Catherine Joséphine Thérèse) Maule は、「ロマン派の伝統」を主題にした研究を進めながら、地方大学で臨時教員として教鞭を執っている。普段はチェルシーのフラットで独り暮らしだが、週末は祖父母の住む郊外の家で過ごす。両親は既に亡い。優れた洋裁師であった祖母が作ってくれる服のおかげでかなり目立つ存在である。物語は、彼女が、キリスト教史を専攻する優秀な教員である同僚の男性に思いを寄せ、かなり不可解な経緯を経てその恋愛が破綻するまでの過程を描いている。その一方で彼女は、大学で『アドルフ』をテキストに3人の学生たちと授業を進めつつ、講演の準備をし、それを成功させて、最後に専任の教員として採用が決まるという展開となる。すなわち、主人公が、精神生活において決定的な敗北に至る過程が、皮肉にも、研究者として順調に地歩を固め社会的な成功を手にする道程と重ね合わされているのである。しかし、それらは決して等価ではなく、常に敗者としての意識がより強く彼女の心を支配している。従って、今回もブルックナーに特有の、不安、焦燥、絶望、諦めといった否定的な色調が小説世界を染めているのである。それでは、主人公の恋愛とは、どのように描かれているのであろうか。

あまり成就の可能性のない3人の男性との関わりを扱った前作とは異なり、この作品では、一貫してただ一人の相手に対する切ないまでの恋慕が語られる。ところが頻繁に言及されるにもかかわらず、その男性像は極めて曖昧で、奇妙に捉え処がない。むしろ、この恋愛は彼女の一方的な思い込みに過ぎないのではないかと疑ってしまうほどである。その Maurice Bishop と、キティは勤め先の大学の談話室で出会い、二人ともロンドンから通勤していたこともあって親しくなった。とは言え、めったに会う機会はなく、彼女は、ごくたまにフラットに立寄ってくれるモーリスをいつも待ち続け、学期ごとの会議で彼の姿を垣間見るのを楽しみにしている。彼の方が、キティをどのように考えているかを示す手掛かりはほとんどない。その人を寄せつけない雰囲気、彼女はいつも気後れを感じ、自分の言いたいこと、聞きたいことも遠慮して、かすかな期待を将来に繋いでいる。モーリスは、かつて婚約していた幼なじみのルーシーが宗教上の理由から結婚の2か月前に婚約を破棄して、カルカットのマザー・テレサのもとに行ってしまったことを話し、自分は既に結婚したも同然だと考えていると無邪気にも告白する。その一方で、教会を研究するために休暇中にフランスへ行く計画を告げ、キティにも行こうと誘ってみたりする不可解な言動をとるのである。その後、彼はどの連絡

もないままにフランスへと出発し、キティは不安のうちにも、パリで落ち合えることを期待して、後を追う。慌ただしい再会は、決して満足できるものではなく、教会で跪いて祈っているカトリックのモーリスを見て、信仰をもたない彼女は、二人の間の越え難い距離を痛感して孤独感を募らせる。翌朝早く、一人で帰国するモーリスを見送るキティは、既に不幸な結末をある程度予測しているようにも見える。その後、しばらくして、突然フラットに立ち寄ったモーリスは、準備中の原稿に目を通して褒めてくれ、彼女の講演が終わったら、お祝いの夕食会を自分の家で開こうと提案する。講演を成功させて、大学での安定した地位を手に入れ、キティは漸く自分の場所を確保してささやかな充実感を味わう。ところが、楽しみにしていた夕食会に来てみると、そこで初めて、モーリスが近いうちにオクスフォード大学に移ることと、かつて彼女の教え子であった美しい娘をパートナーとして選んだことを知って、呆然とするのである。

この二人の関係を特徴づけているのは奇妙なアンバランスである。キティの抱いている恋慕や憧憬にみあうだけの感情の高まりや心遣いはモーリスの側にはほとんど認められない。公の場以外で二人が会う機会は極めて少ないが、それらはいずれもモーリスが、キティのフラットに予告なしに立ち寄るか、研究旅行で訪れるフランスで落ち合いたいとほのめかす、というように、自分の都合のみで一方的に事を運ぶ。キティはいつも待つという受動的な立場に終始し、決して要求しようとはしない。あたかも自分にはそんな権利はないと諦めているかのようだ。疑問や尋ねたいことがあっても、敢えて聞こうとすらしないのである。そして、この関係が恐らく成就しないことをも冷静に予測している。しかも、相手の裏切りとでも言うべき、転任と他の女性との関係とが明らかになった時にも、予め知らせてくれなかったことに動揺を示すものの、相手を非難するでもなく、取り乱すこともなく、従容として事実を受け止めている。自分が不当に扱われたという意識も希薄である。かなり変則的な関係と言わざるをえない。

それでは彼女がモーリスに求めていたのは一体何であろうか。第5章で、かつての婚約者ルーシーとの経緯を聞いたキティは、モーリスが誰をも必要としていないことを知る。

I simply want to live with someone so that I can begin my life. I want you, in fact. And you want nobody.....¹⁾

そして、自分が何を望んでいるかを書き連ねた文章が半ページにわたって

延々と続く。

But I want more……I do not want to be trustworthy, and safe, and discreet. I do not want to be the one who understands and sympathizes and soothes. I do not want to be reliable. I do not want to do wonders with Professor Redmile's group, I do not even care what happens to Larter. I do not want to be good at pleasing everybody. I do not even want to be such a good cook, ……I want to be totally unreasonable, want to be part of a real family. I want my father to be there and to shoot things. I do not want my grandmother to tell me what to wear. I want to wear jeans and old sweaters belonging to my brother whom of course I do not have. I do not want to spend my life in this rotten little flat. I want wedding presents. I want to be half of a recognized couple. I want a future away from this place. I want Maurice.

……2)

責任感が強く、信頼され、思慮深く、思いやりがあつて、人を喜ばせることが上手で、料理も得意、そんな女性がいかに退屈で魅力に欠ける存在であるかを、彼女はよく承知しているのである。そして自分がまさにその通りであることも。だからこそ、「全く道理をわきまえず、公平さを欠き、自分本位で、美しい」人間になりたいと願っている。即ち、モーリスは彼女がこうありたいと憧れている人間像そのものなのである。だからキティは彼を求め続ける。これは、前作でルース・ヴァイスが「善良な敗者になるより、邪悪な勝利者になりたい」と望むのにも通じる。そして、モーリスがいわば「邪悪な勝利者」の側の人間であることは、明らかである。従つてキティは、彼の気紛れで身勝手な行動に翻弄されながらも、一方でそれに限りなく魅せられているのである。この関係が成就しないであろうということも当然予測しているのだ。なぜなら、彼女がモーリスに引きつけられたのは、彼が全く異質の存在であるから、言い換えれば、自己中心的で、確固たる信念を持ち、逡巡することなく、人生を選び取っていくことができる人間であるからなのである。

もし彼女が、より安全な恋愛関係、もしくは結婚という社会的安定を望んでいたのであれば、他に可能性が少なくとも2回あったはずである。キティは、かつて何度かパリを訪れた時に、ジャン・クロードという遠縁に当たる青年と交際していたことになっている。祖母のルーズが望ましい結婚相手

として期待していたにもかかわらず、この関係は途切れてしまう。彼女は、あからさまに関心を示され、干渉されることを好まなかったのだ。モーリスのように、「近づき難く、何を考えているのか、どう感じているのか、決して予測できない」人物、即ち、未知の存在、自分とは無縁の存在を、求めているのである。また、モーリスに会うことを期待して渡仏する途中の、汽車で知りあうパスコウ氏も、キティに関心を示し、何らかの発展を予期させるが、結局、もう一度パリで会うだけに留まってしまう。

これらの展開から明らかになるのは、キティが、ルース・ヴァイスと同様「間違っただけの男性」を選んでいくことである。フランク・カーモードの指摘によれば、「ブルックナーの女たちは、大部分がルースと同じ運命をたどる。謙虚で、聡明で、誠実な女たちは・・・最後には必ず裏切られて、善良で有能な女は次点かそれ以下に終ることをしたたかに思い知らされる。この独特の運命こそ、ブルックナーのすべての作品の主題である」³⁾という。しかし問題は、なぜ主人公たちはいつも自分とは共感する部分を持たない、理解を越えた相手を求めるのかという点であろう。それを解明するために、まず、彼女のおかれている状況を詳しく見てみることにする。

キティは、父の遺産が入る二年前に、祖母と母の勧めに従って、チェルシーのフラットに移り、週末には家に帰る生活を続けている。しかし、母の死後、急速に年老いて、共通の話題も乏しくなり、価値観も異なる祖父母のもとに帰ることは、次第に重荷になりつつある。祖母が心を込めて作ってくれる服や、祖父が用意してくれる手の込んだ食事も、煩わしく感じることもすらある。彼女が子供の頃、母は、祖母が作ってくれた淡いピンク色の美しい結婚衣装を見せてくれ、時期がくればあなたも作ってもらえると言っていた。しかし三十歳になっても、一向にその気配のない孫娘に、祖母ルイーザは悲しみと失望を隠せない。キティも、祖父母の期待に沿うことのできない自分を、後ろめたく、申し訳なく感じている。彼女は、祖母やフランスの親類たちの属する世界からは遠く隔たってしまったことに一抹の悲しみを感じずにはいられないものの、やはりそれは自分の意志で選んだ道なのだと自らに言い聞かせる。かと言って、一人で研究を続ける都会での生活に満足することもできない。モーリスとの結婚を望んでも到底かなわないことは承知の上である。いずれ祖父母が亡くなれば、天涯孤独の身になってしまうことに漠然とした不安も感じている。彼女の前には様々な可能性はあるが、望ましい選択肢など無いように見える。

ブルックナーの作品には、しばしば、主人公とは対照的な性格の友人ある

いは夫婦が登場して、助力者、忠告者として様々な影響を及ぼすことが多いが、この小説ではかなり違う種類の友人が二人登場する。ひとりはフラットの隣人で、華やかな生活の後、夫に捨てられ、離婚手当で暮しながら、ハロックスあたりを徘徊したり、占い師のもとへ通ったりしてひどく退屈しているキャロラインである。また、もうひとりは同じ大学に勤める先輩教員、ポーリンである。彼女は、グロスター州の小さな村で、かつて学者であった年老いた盲目の母と一緒に暮している。週末に遊びに行ったキティは、友人の姿を見て、自分の生活を変えずにおくと、この先何が待っているかを思い知るのである。皆に羨ましがられる解放された女性の行き方に胸を詰まらせ、自分はポーリンのようにも、キャロラインのようにもなりたくないを考える。

Kitty felt a pang of pain for her. She comes here every night, even in the darkest winter, she said to herself. There is no one for her to talk to. She has to make arrangements for people to come in and see to her mother during the day. And when her mother dies, what will she do? Probably go on living in the same place, even lonelier. And she knows all this. She is too clever not to know. She is what is called a liberated woman, thought Kitty. The kind envied by captive housewives. She felt an urgent need to put her own life into some sort of order, to ensure that she did not turn out like Caroline or like Pauline, the one so stupid, the other so intelligent, and both so bereft.....⁴⁾

彼女の周囲には、このような人生は送りたくないという見本はあっても、生き方の望ましい規範を示してくれる人物は見当たらない。あくまで、キティは独力で、それを見出さなくてはならないのである。祖父母や両親とは、生き方や価値観において大きく隔たってしまった彼女にとって、安全な結婚という妥協策に頼ることなく、孤独に陥らない人生を選ぶことは至難の技であるように思われる。

A Start in Life では、「食事」のイメージが、主人公の価値観を示す手掛かりとなっていたが、この作品でも、「食べる」場面は、頻繁に登場し、新たな意味を担って展開されている。次に、「食事」が、小説世界でどのように機能しているかを考察してみる。ブルックナーの描く女性たちは概して「食べる」ことに強烈なコンプレックスを抱いているが、キティもまた、一人で食事をする時には、ラジオを聞いたり、本を読んだり、歩き回ったりしながら、

すばやく済ませるようにしている。

When dining alone, Kitty Maule tended to dispatch the meal as quickly as possible and also to distract herself from the actual business of eating. She found it helpful to balance a tray on her knees rather than to sit down forlornly at an empty table, and to read, listen to the radio, or even sometimes wander about, as if only lending herself to the task of digestion.⁵⁾

この神経症的な食習慣に対しては、かなり説得力のある原因が与えられている。三年前に母が、夕食のテーブルで亡くなったのである。それは、穏やかな死であったが、その情景と祖父の悲痛な叫びが耳から離れず、それ以降、食欲が不規則になる。即ち、彼女にとって、「食べること」は、「死を思い出させるもの(メント・モリ)」という逆説的な意味を伴っていることになる。そんなキティもモーリスのために夕食を用意する時には、食事を楽しむことができた。また、パリで落ち合った時、モーリスはひどく空腹で、すぐに一緒に昼食を食べに行く場面があるが、キティは自分の皿も差出し、相手が勢いよく食べるのを見て、満足する。

She handed over her plate. His physical presence so bemused her that her own awakened appetite seemed subsumed into his. He was eating for them both, and that was how she would have it. To feed him, at that moment, was all she wanted to do ; the food was enhanced by his enjoyment of it and she speared a potato from his plate because it looked so much more appetizing than when it had previously featured on her own.....⁶⁾

しかし、その後見学に行ったサン・ドニの教会では、二人の価値観と関心の違いが決定的となる。彼女の存在すら忘れてしまったかのように一心に見入っているモーリスを見て、キティはひとりで案内書を手には、歴代の王や王妃たちの墓の方へ歩いて行く。延々と続く数多くの墓碑や石像を見ながら、死こそが現実だが、死も分かち合う人がいれば、受け入れやすいであろうと考える。モーリスが跪いて祈っている姿を見て、キティはひとり置き去りにされたように感じて、亡き母に呼びかけ、涙を流す。

Then she saw Maurice sink to his knees in front of the statue of

the Virgin by Dagobert's tomb and watched his bent head as he prayed. He has left me, she thought ; I am alone, and she leaned against a pillar, her throat aching. She tried to pray and failed. Then she said silently, Marie-Thérèse, dearest little mother, are you there? Is this what you wanted for me, your heart's darling, ……Do you see him, my pious lover, for whom I wait in hotel rooms, whose notes I type, whose dinners I cook, and who will never marry me?……⁷⁾

この時彼女は、死や母という、今まで拘り続けたものと直面する機会をもつ。それと同時に、モーリスとの不毛な関係を冷静に判断するのである。ホテルに戻ると、お茶を頼み、お菓子を買ってきて、二人で食べる。

They ate ravenously, their mouths perfumed with the sweet mixtures. When they kissed, they exchanged identical breaths, and she made a vow that she would never forget that particular taste as long as she lived.……⁸⁾

この場面は、彼女がモーリスと分かち合った数少ない幸福な瞬間であったに違いない。しかし、この一節はキティが既に別れを予期していることを感じさせる。その後、二人は夕食に出掛けるが、ここでは立場が逆転し、空腹なのはキティの方で、モーリスは静かに眺める側である。これ以降は、彼女が積極的に「食べる」情景が描かれるようになることは注目に値する。そして、小説の最後の場面では、自分の両親について語りながら、まさに食べ始めようとするところで終わっているのである。

'My father was in the army,' said Kitty Maule slowly, 'He died before I was born.' And picking up her spoon, she prepared to eat.
……⁹⁾

サン・ドニ教会での啓示的な体験は、この小説におけるターニング・ポイントの役割を果たしている。この後、キティは「食べる」ことにこれまでより意識的になるだけでなく、周囲の人々との擬似的な別れを次々と体験する。まず、『アドルフ』を読みながら三人の学生と進めていた授業が最終回を迎える。キティはロマン派の特質を「耐え難い状況の中で際限なく思考し、しかもその状況に縛られたままである」と結論づけながらも、テキス

トの選定を誤ったかもしれないと思う。彼女はまさにロマン派的な気質を備えた人物に違いない。

続く12章では、近づく公開講義に着る服を祖母に仕立ててもらうために祖父母の家に数日間滞在し、現在の自分の心境を見つめて、これまでの生き方に決別し、新たな別の人生へと歩みを進めようとする。

As she sat in the garden of her grandparents' house, she was aware that the time had come to say goodbye to those who had been with her on the first half of her journey, and that she must now prepare to live a different sort of life. No more clairvoyants, no more waiting in hotel rooms, no more glum acceptance of Caroline's advice. From now on she would be more definite, more admirable, she thought. She would eat reasonable meals, she would not panic before her lecture, she would deal sensibly with everyone, but would not allow anyone to dominate her. She was saying goodbye to her very pliancy, the quality that had kept her, like her mother, a girl for far too long. And I am thirty she said to herself. I am already thirty. It is time.....¹⁰⁾

ここでキティが、「もっと確信に満ちた、称賛されるような」自己を目ざすと言う時、より具体的には、「きちんとした食事を摂り、講義の前に慌てたりせず、上手に人と付き合い、誰にも振り回されることのない」という極めて平凡で日常的な目標を思い描いている点は多少滑稽な感を免れないが、彼女の特質をよく表している。これまでのように占い師に頼ったり、ホテルの一室であてどなく待ち続けたり、内心うんざりしている隣人の忠告に従ったりする自分を排して、自己変革を試みようとする。そのために、彼女の成長を妨げてきた母親譲りの柔順さという特質に別れを告げ、新たな再生に期待するのである。キティは、この時、母の分身としての自己をより自立した存在へと高めようとしている。母の分身とは、すなわち祖母の愛娘としての役割であり、これまで祖父母の家での自分と外の世界での自分との乖離に悩み、何とか両者を和解させようとしてきた彼女が、ようやく自分の取るべき方向を見出したと言えるであろう。漠然とした変化の気配が感じられるという描写は、キティの抱いている期待と不安を如実に表現している。

For two days she sat in the garden or walked about the streets,

and she would remember those two days as a curious interval, when all things seemed possible, an almost mystical time of promise and anticipated fulfilment. The hours of the day were uniform in their bright silent intensity, and the sun did not appear to move. There was a suspension of appetite and of all agitation, replaced by an extraordinary concentration of the faculties, a stillness, something strange and new. It was as if some genuine metamorphosis were taking place, yet she did not know what it was.....¹¹⁾

出来上がった服を携えて祖父母の家を辞する場面は、彼女が二人との一種の精神的な決別を決意したことを伺わせる。

As she turned to give them a last wave, as she always did, she saw their two faces at the window, white masks that dwindled as she walked backwards down the hill, still waving.....¹²⁾

次の章では、祖母の仕立ててくれた蜂蜜色の服を着てみて、以前従兄のジャン・クロードの結婚式に行った時のことを思い返す。フランスの田舎の村での式には、大勢の親戚たちが集まり、披露パーティで従兄と踊ったキティは、黄色の服がよく似合うと褒められ、次は君の式に招いてほしいと言われた。彼女は、祖父母が自分のためにこのような式を楽しみにできないことを後ろめたく感じ、叔父、叔母たちの属する世界から遠く隔たってしまったことを再確認する。ここでもキティは、親戚たちが何の疑いもなく継承している伝統的な価値観や生き方とはっきり袂を分つことを意識しているのである。

To show that I have not forgotten them. But I have already left them behind. Their way is not my way. My way is not their way.

...¹³⁾

翌日、公開講義を目前に控えて、原稿に手を入れながら落ち着かない気分のキティは、突然占い師マダム・エヴァのことを思い出して密かに訪ねてみる。結婚式について考えていることを言い当てられ、将来には、成功と安定があり、今までのような孤独には陥らないであろうと元気づけられる。キティは帰り際に、暑さのために外出が億劫だと聞いて、代わりに食料の買い物

を引き受けることにする。カフェで朝食を摂り、買い物を済ませてから届けに行く、誰も出ない。不審に思っていると、隣人が「カートライト夫人に用事ですか」と尋ねる。その後、猫を抱いた夫人が向かいの角から姿を現し、食料を渡して、お互いに手を振りながら別れる。この一見些細な挿話も、主人公の一連の心境の変化に深い関わりがある。キティがこの占い師に関わるようになったのは、第六章で隣人のキャロラインに連れられて来たためであった。気が進まないながらも、その言葉に耳を傾けていると、マダム・エヴァは、知的な男性の存在(=モーリス)、身内の老女の問題(=祖母ルイーズ)、外国の教会(=この後に起きるサン・ドニでの体験)など、キティにとって最も関心のある問題について断片的ながらもいくつかの指摘をする。更に、「亡くなった母親が見ている」と言われた時、キティは思わず涙が溢れ、自分でも驚いてしまう。

The woman turned the crystal ball in Kitty's palms……‘I see a lady. Your mother? Has she passed?’ Kitty looked at her uncomprehendingly, ‘Mother,’ repeated the woman. ‘Has she passed on?’ Kitty nodded again, her throat thickening. This surprised her for she had never wept for her mother, had never dared to. Did not even dare to think of Marie-Thérèse as her mother. The conjunction of the person and the concept would have moved her in a way she could not afford to imagine. ‘Mother’s watching,’ said Madame Eva. Tears spilled over from Kitty’s eyes. ‘All right, darling,’ said Madame Eva. ‘Mother’s watching.’……¹⁴⁾

彼女が、サン・ドニでモーリスとの越え難い距離を痛感した時に、亡き母親に呼び掛けるのは、そのためなのだ。即ち、マダム・エヴァは、母親を呼び出した一種の霊媒であり、言い換えれば、キティの内に潜在していた母親との強い結びつきを意識の表層にまで浮かび上がらせる機能を果たしていたのである。従って、神秘的な存在であるべきマダム・エヴァが、実は、暑い日に出掛けるのを億劫がって買い物を人に頼むような、ごく平凡な主婦、カートライト夫人であったとわかることは、幻滅ないしは霊的な属性の失墜を伴う出来事である。恐らく今後、キティがここに相談に来ることはないに違いない。この別れの場面は、占い師としてマダム・エヴァとの決別であり、それは同時に、彼女が呼び出した母親という存在からの一種の解放をも意味していると考えられる。

このようにキティは、三人の学生、祖父母、フランスの親戚たち、マダム・エヴァそして母親との、様々な次元での決別を経験して、最後にモーリスとの精神的、物理的な別れに至るのである。本来ならば、クライマックスとなるべき場面であるにもかかわらず、キティは、パーティの行われるモーリスの家に到着してから食事が始まるまで、一度も彼に会う機会も、言葉をかわす折もない。オクスフォード転任のニュースや、別の女性の存在をキティが知るのには、同席していた先輩格の教授たちの話を通してであり、この場面は徹底してアンティ・クライマックスの様相を呈している。そして「食事」が始まる場所でこの小説は終るのである。

They took their places at the table, Maurice and Miss Fairchild at either end. I lacked the information, thought Kitty, trying to control her trembling hands. Quite simply, I lacked the information. She had the impression of having been sent right back to the beginning of a game she thought she had been playing according to the rules. And there was the rest of the evening to be got through. Professor Redmile was in ever more radiant form. 'I must confess, Miss Maule, that we were discussing you before you arrived. We were trying to work out which half of you was French.'……'It was Kitty's mother,' supplied Maurice. 'Isn't that right, Kitty?' 'My father was in the army,' said Kitty Maule slowly. 'He died before I was born.' And picking up her spoon, she prepared to eat……¹⁵⁾

モーリスがキティに話しかけた最後の言葉が、母親に関するものであること、そして彼女が、これからまさに自分の家族について語り始めようとするところで締め括られていることは、何を意味するものであろうか。まず、モーリスは、これまでキティを理解していたこともなければ、理解しようとしなかったが、この最後の場面で偶然とは言え、彼女の存在の核心に迫る言及をしたことになる。キティの一族は、祖母ルーズ、母マリ・テレーズ、娘キティ（キャサリン・ジョセフィン・テレーズ）この三人の極めて強い結びつきの上に成り立っている。母の死はこの関係を潜在化することはあっても弱めることにはならなかった。いつも祖母の手製の服——その布地はしばしば母のために準備されたものを使ったのであるが——を身に纏うキティは、祖母の柔順な娘でもあったのである。即ち、母と娘は分かち難く結びついてい

るのである。それをモーリスは凶らずも指摘したことになる。

しかしまた彼女は、一方で心優しい娘であることだけに充足せず、祖父母の与えてくれる庇護と愛情を重荷に感じていた。彼らが体現し、無言のうちに孫娘に期待している生き方は、彼女自身の選択から遠いものであったためである。とは言え、一人娘であった母を亡くした以上、年老いた祖父母にとって彼女が母に代わる存在となることは避けられない。マーガレット・ドラブルの主人公たちは、しばしば地方の両親のもとを離れて都会での自由な生活を選ぶが、ブルックナーでは、親元から完全に独立することができない場合が顕著に見られる。郊外の祖父母の家での生活と、ロンドンのフラットでの独り暮らしとの間を往復するキティの心情は複雑に分裂している。彼女は、祖父母やフランスの親戚たちが信じて疑わない価値観や生き方——時期が来れば順番にしかるべき結婚をして、親戚を大勢招いて故郷の教会で式を挙げ、一族の構成員として迎えられ、家族を再生産していくという、伝統的な人生——に自分を適応させることができない。そして、それは何らかの人的欠落ゆえの不適應ではないかという不安に悩まされている。同時に、より自分に相応しい別の生き方があるのではという期待を抱かずにはいられない。彼女は、伝統的な家族を中心とする生活形態をもはや信じることはできないし、かと言って、自立して一人で生きていくことに完全な満足を見出す自信もないのである。しかし、一方で家族という一種の呪縛から逃れるためには、他に選択の余地が無いことにも漠然と気づいている。言わば八方塞りの状態なのである。

A Start in Life の最後の場面で、ルースは年老いた父親と暮らす生き方を選び、食事を準備していた。それに対して *Providence* では、キティがこれから両親について語りながら、食事を始めようとしているところで終わっている。軍人であった父親を早くに亡くしたことに手短かに触れて、このあと彼女は母親について話すはずである。母について語ることは、自分の根源を解き明かすことである。それは、とりもなおさず自分について語ることを意味する。自己を客体化し、見つめて、しかもそれを語る、即ち、他人に伝えようとするという行為は、これまで常に視線をモーリスという他者へと向けていたキティには見出せなかった姿勢である。異質の存在であるモーリスを求めることで、彼女は無意識のうちに自分自身を否定し、弾劾してきたのである。言わば、彼女の恋愛とは、自己嫌悪ゆえの現実逃避願望の一形態として考えられる。しかしモーリスとの決別によって、この時、彼女は自らを直視し、漸く受け入れ始めている、と言えるであろう。まだ、自分を許すところまでは

至っていないとしても。言い換えれば、それは、常に自己と周囲の世界との間に違和感を抱いて生きてきたキティが、現実と和解する過程の第一歩でもある。避けることのできない自分を如何に受け入れるかという問題こそは、ブルックナーの文学が繰り返し描く主題である。リン・V・サドラーが「人生の消極的な受容」¹⁶⁾と呼んでいるのは、このような姿勢なのである。しかし如何に消極的に見えようとも、主人公が自分から「食べる」という行為に向かおうとしている点には注目すべきであろう。「食べる」ことは、直接に「生きる」ことに繋るだけではなく、外部の物を、自分の内部に受け入れることを意味するからである。とりわけ彼女にとっては、それは、母の死という傷痕からの解放でもある。ともすれば自己否定的な傾向に陥りがちのキティは、試練を経て、ようやく自らを語ることによって外界との新たな関係を回復し、あるがままの自己を受け入れようとする姿勢を示すに至ったのである。

以上のように、*Providence* は、前作と多くの共通点を持ちながらも、その結末においては、より主人公の孤独な生への意識が先鋭化していると言えるであろう。更に次の第三作 *Look at Me* では、物語が一人称体で展開される。ブルックナーの主人公は、次第に自らを見つめる視点を持ち始めたのである。

注

- 1) Anita Brookner, *Providence* (Triad Grafton) p. 61.
- 2) *Ibid.*, pp. 62-63.
- 3) Frank Kermode, 'Losers' by 'London Review of Book', September 5, 1985, "Switch" 1991年1月号 p. 106 掲載.
- 4) Anita Brookner, *op. cit.*, pp. 83-84.
- 5) *Ibid.*, p. 18.
- 6) *Ibid.*, p. 120.
- 7) *Ibid.*, pp. 124-125.
- 8) *Ibid.*, p. 126.
- 9) *Ibid.*, p. 189.
- 10) 11) *Ibid.*, p. 148.
- 12) *Ibid.*, p. 151.
- 13) *Ibid.*, p. 165.
- 14) *Ibid.*, p. 74.
- 15) *Ibid.*, p. 189.
- 16) Lynn Veach Sadler, *Anita Brookner* (Twyne, 1990) p. 33.